



敦煌本『縁起心論釈備忘録』<sup>224</sup>

漢訳:

辯楞迦作達磨多訳『縁生論』(大正 1652)<sup>225</sup>

辯楞迦作不空訳『大乘縁生論』(大正 1653)

『因縁心釈開決記』(大正 2816)<sup>226</sup>

PH のテクニク本に関しては、まずサンスクリットとして、ゴーカレー氏によるラサ本とギルギット本との 2 本がある。ラサ本は、まず偈頌のみで 5 偈あり、続いて、全てが散文からなる第 3 偈までの注釈で構成される。ギルギット本は、偈頌のみの 6 偈 (第 1-5 偈と第 7 偈) の後に、散文からなる注釈が続くが、第 6、7 偈を含んだ最後の部分を除く。これら 2 本間では細かい点で多少の出入りはあるものの、ほぼ同じテクニク本といえる。作者に関する記述はない。ラサ本の年代は明らかでないが、ギルギット本は 600 年頃のギルギット体 (Gigit script) で筆写されているという<sup>227</sup>。後者は冒頭の偈頌部分に第 7 偈が加わっているが、それはなぜか、あるいはなぜ第 6 偈を欠いているのか、不明である。ギルギット本の筆写者が注釈中からこの第 7 偈を抜き出して、冒頭部に追加したものであるうか。

大蔵経所収のチベット訳では、偈頌のみのもの (P nos.5236, 5467) が 7 偈からなり、それら 7 偈が再出する注釈付きのもの (P nos.5237, 5468) が別に訳出されている。しかし本来の偈頌部分は 5 偈であろう。なぜなら、7 偈中最後の 2 偈は内容的に前 5 偈とのつながりがなく、注釈もなされていないからで、これら 2 偈はおそらく注釈者によって付加されたものだと考えられる。後にみる辯楞迦の『縁生論』でも、PH 1-5 は含まれているが PH 6-7 は含まれない。さらに韻律も前 5 偈はアーリヤー (Āryā)、最後の 2 偈はシユローカ (Śloka) である<sup>228</sup>。また著者に関して、これらチベット訳すべにおいて、作者はナーガールジュナとされている。翻訳年代に関しては、注釈の一方 (P no.5237) にのみ翻訳者名が記されており、少なくともこの注釈は 9 世紀初頭の訳出であることがわかる<sup>229</sup>。また、デンカルマ目録やパンタン目録にも PH の偈頌とその注釈の記載が

あり<sup>230</sup>、これらは現在の大蔵経所収のものと同じの可能性がある<sup>231</sup>。

大蔵経所収の漢訳 (大正 1654) は、前半が偈頌のみの『因縁心論頌』で 7 偈からなり、後半が、最後の 2 偈を除けば全てが散文からなる注釈『因縁心論釈』である<sup>232</sup>。サンスクリット、チベット訳と漢訳大蔵経との 3 本間でのテクニクの比較研究からは、この漢訳が大蔵経所収のチベット訳からの重訳である可能性が指摘されている<sup>233</sup>。そうすると、偈頌のみの 7 偈の部分抽出したのは、チベット訳者であることになる。しかもそれは誤った抽出であるから、チベット訳者、漢訳者ともに、偈頌のみのテクニクを知らなかったことになろう。

敦煌本には、チベット訳が 1 系統と漢訳が 2 系統ある。この敦煌本チベット訳は、決定訳語による翻訳であるため<sup>234</sup>、翻訳年代は 9 世紀以降と考えられる。敦煌本チベット訳『縁起心論頌』(Pelliot Tib.769) にはシェレルジャプ氏による校訂があり、奥書きにはナーガールジュナ作とある<sup>235</sup>。また敦煌本漢訳は、2 系統のうち一方が大蔵経の底本を含むもの (C1)、他方が「稽首曼殊室利童子」などの訳語からチベット訳からの重訳と考えられるもの (C2) である。小林氏は、敦煌本の漢訳とチベット訳それぞれについて、諸テクニクを比較し、さらにそれぞれの漢訳とチベット訳との比較も行なった。まず敦煌本のチベット訳は、チベット訳大蔵経本と細かい違いが見られるけれどもほぼ一致することが確認され<sup>236</sup>、次いで敦煌本の漢訳 2 系統は、ともにこれらチベット訳から重訳されたもので、大蔵経の底本を含む方 (C1) が、もう一方 (C2) より、より厳密な翻訳になっているという<sup>237</sup>。

梶山氏は敦煌本漢訳 (C1) と大蔵経チベット訳、さらにラサ本とギルギット本のテクニクを比較検討し、前 2 者、ギルギット本、ラサ本の順に増広の過程が見られることを示した。漢訳がチベット訳からの重訳であることを考慮すると、最も古形を保つのはチベット訳ということになる。上にみたように、チベット訳の大蔵経本と敦煌本はほぼ一致するが、両者の関係は明らかでない<sup>238</sup>。

浄意作善提流支訳『十二因縁論』は、梶山氏が、「ラサ本とほぼ同一のものではあるが、『大蔵経』チベット本、敦煌本〔漢訳〕ほどに親近性は示さない」<sup>239</sup>と述べるように、『因縁心論頌』および『因縁心論釈』の異訳である<sup>240</sup>が、現存サンスクリットの逐語訳とはいえず、元になったテクニクの系統が異なるか、漢訳者によって意識されたも

<sup>230</sup> デンカルマ no.596: *rTen cñi 'brel par 'byun ba 'i sñiñ po 'i tsñig le 'ur byas pa dan / de 'i rnam par bśad pa / 54 śloka* // (Lalou, M. (1953) p.333.26-27); パンタンマ no.548: *rTen cñi 'brel bar 'byun ba 'i sñiñ po 'i rtsa ba / śloka (śrī)*, no.549: *rTen cñi 'brel bar 'byun ba 'i rtsa ba dan rnam par bśad pa dan*  
<sup>231</sup> 『教仏典 III』 pp.125.3-4.  
<sup>232</sup> 宇井伯寿 (1969) pp.237.1-242.6.  
<sup>233</sup> 斎藤明 (1985) p.331.16-17.  
<sup>234</sup> 小林守 (2000) p.50.23-24.  
<sup>235</sup> *śloka dpon Kū sgrub kyis mñad pa rñzoos so* //: Scherrer-Schaub, C. A. (1987) p.108.7-8.  
<sup>236</sup> 小林守 (2000) pp.50.23-51.8.  
<sup>237</sup> 小林守 (2001).  
<sup>238</sup> 小林守 (2000) pp.50.23-51.8.  
<sup>239</sup> 梶山雄一 (1980) p.92.13-14.  
<sup>240</sup> 宇井伯寿 (1969) pp.252.1-256.14.

<sup>224</sup> Stein Tib. 621-2, 622. この 2 本の校合テクニク: Jamieson, R. C. (2000) pp.113-125.  
<sup>225</sup> 本漢訳が敦煌でチベット語に再翻訳されたものとして: Stein Tib. 588-3, 588-4, 619; Pelliot Tib. 770, 771.  
<sup>226</sup> Stein Ch. 0269a, 0495v, 0541, 2695v; Pelliot Ch. 2211, 2638v, 海 039, 麗 083.  
<sup>227</sup> Gokhale, V. V. (1978) p.64.3-4.  
<sup>228</sup> 第 6 偈はサンスクリットが存在しないが、YS 12 と類似した内容であって、YS 12b での *stgje bar* が PH 6b で *chad par* に置き換わっているほかは一致している。そして、YS は他の部分のサンスクリットからシユローカであることが明らかになっているから、ここでの両偈もシユローカであるといえる。こうした本来の偈頌数に関する議論は、以下の諸論文にみられる: Dragonetti, C. (1978) p.90.note 9; 梶山雄一 (1980) p.95.8-17; Lindner, Chr. (1982\*\*) pp.167.13-168.3; Dragonetti, C. (1986) pp.109.15-110.27.  
<sup>229</sup> 『教仏典 III』 p.125.2-3. 翻訳者はジナミトラ (Jinamitra)、ダーナシラ (Danaśīra) (Danaśīra, シーレーン・ラボーディ (Śitendrabodhi)、イェンエーデ (Ye ses sde)) からで、YS のチャンドラキートルチチベット訳 (P no.5265) と同じ歌書目である。小林守 (2000) p.50.16-18.

のかであろう。大正1654と同様に、まず偶頌のものがあり、続いて注釈付きのものがくるが、偶頌のみの部分は正しく5偈が挙げられている。作者とされる淨意に関しては明らかでないが、この人物をPHの作者とすかどうかでドラゴネットティ氏とリントナー氏との間で議論がある<sup>241</sup>。ドラゴネットティ氏はこの漢訳の伝承を重視し、注釈を含めたPHの作者を淨意とし、そのサンスクリット名を\*Suddhamati、その年代を菩提流支の活躍した508-537以前とする。対してリントナー氏は、ひとまず淨意をナーゲルジュエナと同一人物だとするが、注釈を含めたPHは中観派の注釈者によって言及されることもなく、SSやVVやVPやVPといった真作とされるものの散文とは形式的に全く類似しないことから、奥書きの記述をそのまま受け入れることはできないとして、作者の決定を保留する。また白崎顕成氏も、こうした漢訳の伝承などからPHがナーゲルジュエナ作であることは「証明しにくい」とし、加えて10世紀後半のジターリ (Jitāri) はPHを真作と考えていなかった様子を指摘する<sup>242</sup>。

次に関連作品に関して、敦煌本『縁起心論釈備忘録』はチベット語文獻であり、前半が『縁起心論釈』にあたり、後半がそれに対する備忘録である。これには斎藤明氏による研究<sup>243</sup>があり、それによれば、本書は「サンスクリットや漢語からの訳書ではなく、チベット語による撰述書であり、しかも敦煌方面において著された、講義あるいは学習上の備忘録であることが推定される」<sup>244</sup>という。この前半部の『縁起心論釈』にあたる部分に関しては、「偶頌部分をも散文体に戻すことにより、偶頌の引用部分と地の註釈部分の区別を不明瞭にしている」<sup>245</sup>ことから、「現存版本および敦煌本の中に伝えられている欽定訳との間の系統上の隔りが問われる」<sup>246</sup>という。さらに決定訳語制定以前の訳語がみられることから、「すでに旧訳時代に成立していたであろう」<sup>247</sup>とされる。

舊楞伽作蓮磨多訳『縁生論』は、30偈とそれに続いて全偈が再出する注釈からなる<sup>248</sup>。これら30偈のなかにはPHの5偈が含まれている。『縁生論』とPHの偈番号を対照させると、6, 26, 27, 28, 30 = 2, 1, 3, 4, 5。不空訳『大乘縁生論』はこの蓮磨多訳『縁生論』の異訳である。

『因縁心釈開決記』は法成作と推定されるが確定をみない。これには上山大峻氏による研究がある<sup>249</sup>。それによると、本書は龍猛作『因縁心論釈』(大正1654)への注釈、つまり復注である。そして、「敦煌、あるいはその周辺地域で漢文で新たに著されたものであるろう」<sup>250</sup>という。また上山氏によって、チベット支配時代(786-848)の敦煌において、PHや『稻芋経』をはじめ、十二支縁起に関する経論が流行していた様子が明らか

になった<sup>251</sup>。

PHの翻訳年代で現在分かっているものうち、最も古いのは『十二因縁論』の漢訳者菩提流支の年代(508-537年に活躍)である。また先に触れたように、デンカラム目録やパンタマン目録にはPHの記述がある。このことから、PHは9世紀初めにはチベットに伝わっていたことが分かる。また上山氏の述べたように、敦煌でも同じころ、本書を始めとする因縁論関係の文献の翻訳が盛んであった。引用で最も古いものはチャンドラケーラティによるもので、7世紀前半のものである<sup>252</sup>。結局、年代で最も古いものは、菩提流支の6世紀初めということになる。

さて著者問題に関して、梶山氏はPHの注釈者による第6偈がYS 12と酷似していることを指摘し、PHの第6偈はこのYS 12の文脈を知らない限り十分には理解できないこととから、この2偈が「緊密な関係」にあつて「この二つの著作の著者が同一人であった」と想定せざるを得ない」とする。またPH 1の注釈中で、「十二支は縁起したものであって、原質・決定性・プルシア・仮相・自在神・時・自然・随欲・化生・偶来性などから生じたものではない」と説かれるが、これはSL 50にも同様の記述がみられることから、両書の作者が同一人であるということではできないにしても、「両書の親近性の証差とはなるであろう」とする。氏はこれら2点と、PH中の偈がBodhicaryāvatāra-pañjikā, Prasannapadā, Abhisamayālakṣhānaなどの重要な論書に引用されることから、PHの「頌及び釈はともにナーゲルジュエナに帰するものが自然である」とする<sup>253</sup>。さらに注釈も真作であることとを支持する見解として、シェレルジャワブ氏は5偈よりも7偈の方がナーゲルジュエナの思想をよく理解できると述べる<sup>254</sup>。こうした見解は妥当なものであり、漢訳での伝承に問題は残るけれど、われわれも偶頌、注釈ともに真作と考える。

内容に関して、梶山氏の分析によれば、PHに説かれる縁起思想には「十二支を煩悩・業・苦の三グループに分けること」と「移行しない続生を主張すること」という二つの特色がある。まず前者の三分類に関しては『十地経』、『大毘婆沙論』、『大智度論』にもみられる。『十地経』の例はナーゲルジュエナに先行するものであって、この三分類が彼の時代の前後に一般的であった様子がうかがえ、『大毘婆沙論』と『大智度論』はナーゲルジュエナへの帰属を強化させるものではあってもほぼ同時代のものといえ、PHの「ナーゲルジュエナへの帰属を強化させるものではあっても、反証となることはない」という。次に第二の特色に関しては、『十地経』と、これもナーゲルジュエナ以前の成立と考えられる『稻芋経』に、同様の思想を見てとることができる。またこの「無移生の続生」は中有が存在するか否かの問題と関係し、この議論がパーヴィヴェエカ (Bhāviveka)<sup>255</sup>のPratyāgraddhāにみられる。そこで大衆部の説として紹介されている部分は、PH 5と一致する。梶山氏はこの点に関して、そこに説かれる思想を「最初に説いたのは大衆部で

<sup>251</sup> 上山大峻 (1984) esp. pp. 79.1-81.7; 斎藤明 (1985) pp. 342.15-343.2.

<sup>252</sup> PHの引用は、チャンドラケーラティのPP, プラジュエニヤカラマティ (Prajñākaramati) の Bodhicaryāvatārapañjikā, 華嚴のナーゲルジュエナの Pañcakāra (筆者には確認できず)、カンパバラバダ (Kambalapāda) の Nava-slokiにみられる; Jamieson, R. C. (2000) p. 80.28-32.

<sup>253</sup> 梶山雄一 (1980) pp. 108.7-111.13.

<sup>254</sup> Scherrer-Schaub, C. A. (1987) p. 109.15-18.

<sup>255</sup> この人左については江島憲教 (1990) を参照のこと。

あるう」とし、「ナーガールジュナはその思想を継承して『因縁心論』に組み入れ、大衆部よりさらに徹底した形で十二支縁起を解釈しなおし、空性の縁起の理論を展開したの  
 であろう」とする<sup>256</sup>。MK との関係でいえば、PH の十二支縁起解釈は MK XXVI と  
 の関わりが深い<sup>257</sup>。MK と PH の前後関係は定めにくいのが、SS や VV が MK から派生  
 したものだといわれるように、PH も MK の補足として著されたものかもしれない。ま  
 た梶山氏が、「PH の第 6 偈はこの YS 12 の文脈を知らない限り十分には理解できない」  
 と述べることも考慮して、ここではひとまず、PH は MK の後で、かつ YS と同時期あ  
 たりに着されたものではないか、と想定しておく。

## XI. Mahāyānavimśikā (MVīm)<sup>258</sup>

テキストとしては、トウッチ氏による校訂サンスクリットと出所不明の校訂サンスク  
 リット<sup>259</sup>、そしてチベット訳 2 本<sup>260</sup>、漢訳 1 本<sup>261</sup>が存在する。いずれにおいてもナー  
 ガールジュナ作とされるが、5 本いずれも偈頌数などで一致しない。サンスクリットで  
 はトウッチ氏も述べるように、教簡は後代の付加であり、本来のテキストは 20 偈からな  
 るものであったと思われる。同氏の通し番号でいえば、1-7 が後代の付加、8-27 が本頌  
 と考えられ、最後の 28 は回向偈である。もう一つのサンスクリットは全 24 偈からなり、  
 トウッチ氏のいう 20 偈および回向偈も含んでいるが、異説が多くみられる。チベット訳  
 は P no.5233 が全 23 偈、P no.5465 が全 20 偈からなる。漢訳は本頌が全 20 偈からなる  
 が、それらとは字数の構成の異なる偈が、冒頭に 1 偈、最後に 3 偈ある。漢訳者はこれら  
 4 偈を本頌とは考えていなかった様子である。これらのテキストの違いを表にして、後  
 に示した。この表は、偈頌の教え方が一節異なるけれど、トウッチ氏による表<sup>262</sup>および  
 張保勝氏による表<sup>263</sup>と、1 偈を除いて<sup>264</sup>同一である。5 本のうち、出所不明のサンスク  
 リットとチベット訳の P no.5233 とは前者の第 19 偈を除いてよく一致している。これら  
 のうちいずれが本来のテキストであるのか、諸偈のうちいずれが本頌であるのかは、未  
 だ解決をみない。

以下では、トウッチ氏のサンスクリットで伝わる 20 偈を仮に本頌と考えて、論を進め  
 ることとする。

真偽性に関して、結論から言えば、この MVīm は内容的にも形式的にも MK, RĀ, CS  
 などと共通しており、真作と認めてよいだろう。また 20 偈という規模からには、CS の諸  
 讃歌との親近性を感じさせる。ただ第 18 偈には、「この世のすべては、ただ心のみであつ  
 て」(citta-mātram idam sarvam: 18a) という表現があり、一見唯識学派との関連を疑  
 わせる。セイフオート・ルエグ氏はこの「唯心」という表現と、第 19 偈での外界の存  
 在を否定する記述は、唯識派特有の思想であるとして、本書は後の唯識中観学派のもの  
 ではないかとする<sup>265</sup>。確かに、ナーガールジュナが自説として「唯心」をもちだすこと  
 には問題がある。MK でも「唯心」という語は使われるが、それは対論者の見解として  
 用いられているに過ぎない。ただ、この記述はいわゆる『十地経』の三界唯心を説く個  
 所<sup>266</sup>に通じるものでナーガールジュナが知っていた可能性があること、YS 34 にも類す  
 る表現があることは見逃せない<sup>267</sup>。また、第 19 偈での外界の存在の否定も、ナーガー

<sup>258</sup>校訂サンスクリット: Tucci, G (1956); 張保勝 (2001); チベット訳: P nos.5233, 5465; 漢訳: 大正 1576.

<sup>259</sup>張保勝 (2001).  
<sup>260</sup>P no.5233: *Theg pa chen po ŋi śū pa* translated by Candrakumāra and Śākya 'od; P no.5465: *Theg pa chen po ŋi śū pa* translated by Ananda and Grags 'byor śes rab.

<sup>261</sup>大正 1576: 滿譯訳『大乘二十頌論』

<sup>262</sup>Tucci, G. (1956) p.198.

<sup>263</sup>張保勝 (2001) pp.13-14.

<sup>264</sup>張保勝氏の表では同氏のテキストの第 11 偈に相当するものがトウッチ氏のテキストにはないとされて  
 いるが (ibid. p.14.3)、これはトウッチ氏の第 10 偈に当たると考えられるので、訂正する。

<sup>265</sup>Seyfort Ruegg, D. (1981) pp.29,20-30.5.

<sup>266</sup>荒牧典後 (1974) p.176.2.

<sup>267</sup>瓜生津隆真 (2004) p.115.4-8.

<sup>256</sup>梶山雄一 (1980) pp.111.14-118.5.

<sup>257</sup>ibid. pp.118.7-146.17; 梶山雄一, 瓜生津隆真 (1974) p.426.10.

ルジュナの論じ方としては違和感がある。彼であれば外界の存在そのものを否定するのではなく、その「実体 (svabhāva)」を否定するはずである。しかし帰頌という制約の中でこのようにした表現からは、作者の意図を十分に汲み取ることが難しい。それゆえ、これら2点から偽作と決定するのは保留せざるをえない。

羽溪了諦氏はこの点に関して、*YS*よりも一層著しく唯心論的思想の傾向が現れている、として「かかる論旨は中論等に於ては全く見ることのできないものである」とする。さらに、*MVim*においては「龍樹菩薩に特有な鋭利な論鋒を欠いている」として、それゆえ「真撰でないかも知れない」とする。しかしこれらは「積極的根拠とならない」として、真偽性に関する判断を保留する<sup>268</sup>。

一方で、平川彰氏は真作性に肯定的な見解を述べる。『大乗二十頌論』は「一心・唯心」の思想を簡潔にまとめたものであり、「世間は画師の如し」等と、華嚴経に関係のある言葉があり、『華嚴経』の思想を祖述したものであろう。小品であり、梵・藏・漢の内容に若干の不一致はあるが、とくに龍樹作を否定する理由はない。『華嚴経』の思想を受けている点では、『十住毘婆沙論』に関係が見られる<sup>269</sup>と。

また山口益氏は、*YS*と *MVim*との共通性を強調する。*YS*の「第29偈の邊までは、趣・三有が有無・生滅を離れた幻法・妄取の性であると云ふことは、無明有執、即ち自心の妄取に由るものであることを説示する。その点に於いて此論は大乗二十頌論の行方に相通じたものがある」<sup>270</sup>というが、これは両者において「構想作用 (vikalpa) の否定」が説かれることを指摘したものと見えよう。また「龍樹造大乗二十頌論にも、茲 (*YS* 34) に述べられるような、諸法を識・心に摂在せしめての無自性空開顯の道は示されている」<sup>271</sup>も、同様の点を指摘したものである。

リントナー氏も、*MVim*は形式 (style) と教義 (doctrine) に関する限り *YS*, *RA*, *BV* などと非常に類似しているのとおそらく真作ではないか、とする<sup>272</sup>。これは山口氏と同趣旨の見解であるが、真作性の認められない *BV* との類似性を指摘する点には、問題が残る。

<sup>268</sup> 羽溪了諦 (1931\*) p. 44.

<sup>269</sup> 平川彰 (1979) pp. 38, 14-39. 1.

<sup>270</sup> 山口益 (1944) p. 34, 13-15.

<sup>271</sup> *ibid.* p. 77, 14-15.

<sup>272</sup> Lindtner, Chr. (1982) p. 12, note 16.

Correspondence of the verses

Skt.1	Skt.2	5233	5465	Ch.
1	1	1	1	帰
2	2	2	2	1
3	3	3	3	2
4	4	4	4	3
5	5	5	5	4
6	6	6	6	5
7	7	7	7	6
8	8	8	8	7
9	9	9	9	8
10	10	10	10	9
11	11	11	11	10
12	12	12	12	11
13	13	13	13	12
14	14	14	14	13
15	15	15	15	14
16	16	16	16	15
17	17	17	17	16
18	18	18	18	(22)
19	19	19	19	18
20	20	20	20	19
21	21	21	21	20
22	22	22	22	17cd
23	23	23	23	17ab, 18d
24	24	24	24	(23)
(略号)				(21)

Skt.1: Tucci, G. (1956) pp. 201-203. ここでは最終偈を回 (回向偈) とした。

Skt.2: 張保勝 (2001) pp. 14-27.

5233: P no. 5233, Jamieson, R. C. (2000) pp. 39-46.

5465: P no. 5465, *ibid.* pp. 29-37.

Ch.: 大正 1576. ここでは冒頭の偈を帰 (帰敬偈) とし、最後の部分を (21), (22), (23) と数えた。

(注) 対応させた帰頌同士でも、完全には一致しないものがある。

XII. *Bodhicittavivarāṇa* (BV) 273

本書には、散文文体のものと同様文体のものとの2種がチベット訳にある。小林守氏によれば、「両者とはともに、『大日経』供養法にみられる菩提心の定型句を註解しつつ菩提心の修習を勧める、いわゆる『菩提心修習論書』だが、しかし教文『菩提心歌』が菩提心定型句を逐語的に註解するにすぎないのに対し、偈文『菩提心歌』は単なる逐語訳にとどまらずより豊富な内容を有している。したがって両者は、同一内容を散文と偈文で著わした2作品という関係にあるのではない」<sup>274</sup>という。両者はともにナーガールジューナ作とされているが、研究者の間を集めるのは後者である。本論文でも、特に断らない限り、BVとは後者を指すこととする。

まず散文文体のBVに関して、ダット氏は、あるサンスクリット写本を利用して *Bodhicittavivarāṇa* の校訂テキストを出版した<sup>275</sup>が、その写本の最後のフォリオにはBVの冒頭部分が、そのタイトルも含めて収められていた。バグチ氏はこれがチベット大蔵経のジャヤナンド (Jayānanda) 訳 (P no.2666) に一致することを指摘した<sup>276</sup>。またデルグ版にはカマラシーラ (Kamalaśīla) の『菩提心修習』 (*Bodhicittabhāvanā*, D no.3913, P om.) という作品があるが、これは酒井紫明氏によって、先のチベット訳 (P no.2666) と「ほぼ全同」ではあるが「訳し方に小異が見受けられる」ことが指摘されている<sup>277</sup>。作者がカマラシーラとされている点に関しては、生井智昭氏によって、「その論述においては、中観派からの諸く範疇的存在>>批判が主要テーマとされ、カマラシーラの教学とは異質のものと思われる」<sup>278</sup>とされるように、伝承上の混乱がかがえる。漢訳としては、著者不明の『菩提心観釈』 (大正1663) がある。

ついで偈様文体のBVに関しては、チベット訳に2つ (P nos.2665, 5470) あり、さらにこれに対する注釈書に *Bodhicittavivarāṇa-īkā* (P no.2694)<sup>279</sup>がある。また漢訳に『菩提心難悟論』 (大正1661) がある。酒井氏はこれらチベット訳と漢訳を比較し、両者が完全に一致しないことを指摘している<sup>280</sup>。サンスクリット完本は存在しないが、パテル氏は他の諸作品における引用箇所から、一部サンスクリットを回収した<sup>281</sup>。

著者に関しては、この作品には「アーヤ識」 (kun gzi rnam ses)<sup>282</sup>としか「遍計、依他、円成」 (kun brtags, gzhan dban, yonis su grub pa)<sup>283</sup> といった唯識学派特有の用語が

<sup>273</sup> サンスクリットなし、チベット訳: P nos.2665, 5470; 校訂チベット: Lindtner, Chr. (1982) pp.180-217; 漢訳: 大正1661.

<sup>274</sup> 『梵広典 III』 pp.162.19-29.

<sup>275</sup> Dutt, N. (1931).

<sup>276</sup> Bagchi, P. C. (1931).

<sup>277</sup> 酒井紫明 (1948) p.14.lower 6-13.

<sup>278</sup> 生井智昭 (1989) p.343.note 8.

<sup>279</sup> 注釈書は、スメリティジュニヤニーヤールティ (Smṛitijñānakṛti).

<sup>280</sup> 酒井紫明 (1948) pp.25.lower 2-26.lower 3, 酒井紫明 (1988) pp.98.7-139.8.

<sup>281</sup> Patel, P. (1932\*).

<sup>282</sup> Lindtner, Chr. (1982) p.196.2, 6; 『阿頼耶識』: 大正1661, p.542.上 26, 28.

<sup>283</sup> *ibid.* p.194.2.

みられたり、「唯識論者」 (mams par śes par smra ba)<sup>284</sup> という表現があり、さらには密教との関わりをうかがわせる「真言の門」 (gsaṅ snags kyi sgo)<sup>285</sup> とか「ダーラニー」 (gzuñ mams)<sup>286</sup> といった語がみられる。さらに漢訳のみであるが、「成唯識に説くが如し」<sup>287</sup> という唯識派の論書への言及や、「瑜伽行門」<sup>288</sup> という語がみられる。これらことから、BVの作者が中観派の祖ナーガールジューナでないことは明らかである。

このBVをリントナー氏は真作とするが<sup>289</sup>、上に見たようにそれはありえず、またこれを支持する現代の研究者もいない<sup>290</sup>。本書の冒頭に引用されている偈頌について歴史的な考察を行った生井智 (智昭) 氏によれば、この偈は *Guhyasamājatantra* など密教系の多くの経論にみられ、「七世紀の後半には、この偈が明確に菩提心の定型とされ、実際の修法で二、三度唱えるというように、密教的修法に導入されていた」<sup>291</sup> という。また密教のナーガールジューナの作とされる *Pañcakrama* にも、この偈が導入されている。本書は性格的にも *Pañcakrama* と類似している。またプトクンは、ナーガールジューナの著わしたタントラ文献として、BVと *Pañcakrama* の2書を挙げる<sup>292</sup>。したがって、本書は当偈が定着した時代のもので、*Pañcakrama* の著者と同一の可能性のある、密教のナーガールジューナによるものだと考えられる。セイフォート・ルエグ氏も7、8世紀の密教のナーガールジューナによるものとみる<sup>293</sup>。酒井紫明氏も、密教文献との密接な関わりを示した上で、「後期密教時代の権樹のようである」<sup>294</sup> とする。一方で白崎誠成氏は、「この著作の最も古い引用は *Prasannapādā* (p.41) でBCV (= *Bodhicittavivarāṇa*)」<sup>295</sup> とす

<sup>284</sup> *ibid.* p.192.16.

<sup>285</sup> *ibid.* p.184.16.

<sup>286</sup> *ibid.* p.212.21.

<sup>287</sup> 大正1661, p.542.上 12.

<sup>288</sup> 大正1661, p.542.上 19-20.

<sup>289</sup> Lindtner, Chr. (1982) pp.180-217.

<sup>290</sup> ウィリアムズ氏は次のように述べて、8、9世紀の人物を作者と考える: Williams, P. (1984) pp.83.37-89.26: *BV may have been composed in the 'school' of Santarakṣita; it is certainly quoted in the main by writers interested in the Tantric teachings and/or the Mentalistic or Idealistic traditions of Buddhism. This text is a product of a period when these concerns were predominant (p.88.19-22) It is anyway clear that the evidence for BV being by the Madhyamaka Nāgārjuna is far from sufficient to overrule the quote from GST (= *Guhyasamājatantra*) at the beginning. It would not be impossible to attribute BV to the Tantric Nāgārjuna, although the only merit in doing this would be to explain why BV became associated with the name of Nāgārjuna. (p.88.31-35) BV should be attributed to a writer of the eighth or ninth centuries. (p.89.2-3)*

<sup>291</sup> 生井智 (1970) p.35.upper 4-6.

<sup>292</sup> Obermüller, E. (1982) p.126.7-13.

<sup>293</sup> Seyfort Ruess, D. (1981) pp.104.21-105.1. ドラゴネッティ氏はセイフォート・ルエグ氏の説を支持し、その理由として、BVはチャンドラキールティ (Candrakīrti, ca.600-650)、ブッダババリータ (Buddhapaṭita, ca.470-540)、バーヴィグエーカ (Bhāviveka, ca.500-570?) といった論師によって引用されないこと、BVを引用する文献は後の時代のもので多少なりとも密教的なものであること、BVの冒頭は密教の *Guhyasamājatantra* の記述と一致すること、BVには密教的要素、唯識説の要素、中観派の要素、密伽行中観派の要素がみられることを挙げる: Dragonetti, C. (1986) pp.115.12-119.22

<sup>294</sup> 酒井紫明 (1985) p.1.lower 5-6.

<sup>295</sup> 白崎誠成 (1979) p.152.upper 20-lower 1.

るが、PPで引用されたものは *Samyuttanikāya* からのものであり<sup>296</sup>、必ずしも BV からの引用ではないから、先に考察したこととあわせて考えるとき、同氏の年代設定は誤りといわねばならない。

### XIII. *Sūtrasamuccaya* (SS)

本書は諸経典、なかでも大乘経典を多く引用し、まとめたものである。テキストとしてはカマラシーラの『修習次第』後編 (*Bhāvanākrama*, II) における本書の引用部分からサンスクリットが断片として得られ、またナーガールジュナ作とするチベット訳 (P no.5330: *mDo kun las btus pa, Sūtrasamuccaya*)<sup>297</sup>、作者名を記さない漢訳 (大正 1635: 『大乘宝要義論』) がある。デンカルマ目録やパンタン目録にも記載がある<sup>298</sup>が、両者ともに作者名は記さない。また注釈書として、ラトナーカラジャーヤンティ (*Ratnākaraśānti*) のもの (P no.5331) とアティシヤ (*Atiśa*) によるもの (P no.5333) とがある。

内容は以下の 11 章に分かれる<sup>299</sup>。そして各章それぞれの主題に対して、諸経典が引用される。章の主題は一島正真 (1990) のものをそのまま用いた。

- I. 仏が世に出ることは得難い
- II. 人身は得難い
- III. 恵まれた人生は得難い
- IV. 如来の教えを信ずることは得難い
- V. 菩提心を発す有情は得難い
- VI. 衆生に対する大悲は得難い
- VII. 障法を捨離することは得難い
- VIII. 在家の有情が諸法を熱心に成就しようとすることは得難い
- IX. 如来の涅槃を信解する有情は得難い
- X. 一乗を信解する有情は得難い
- XI. 仏、菩薩の広大性に解入する有情は得難い

このなかで、およそ 70 種類の経典が引用される<sup>300</sup>。

作者に関しては、チベット訳の奥書き、チャンドラキールティ、シャヤンティデーヴァ (*Śāntideva* or *Śāntadeva*<sup>301</sup>)、カマラシーラ (*Kamalaśīla*) によってナーガールジュナとされている。そのことから、リントナー氏は本書を真作としている<sup>302</sup>。またプトゥンも、ナーガールジュナの著作として、本書に触れている<sup>303</sup>。しかし、これらの伝承は比較的後代のものであり、信憑性はやや低い。一島正真氏も述べるように、作者の確定にあたってポイントとなるのは引用教典の中に *Lankāvatārasūtra* (*LAS*) が入っている点である<sup>304</sup>。

<sup>297</sup>校訂本: Pāsādika, Bh. (1989). チベット訳にはこのほか、敦煌文書に SS の断片が存在する。またブダク版 (Pung brag) のカンギェルにも SS が取められている。詳しくは: Pāsādika, Bh. (1997).

<sup>298</sup>デンカルマ no.658: *mDo kun las btus pa / 1500 śloka / 5 barn po //* (Lalou, M. (1953) p.385.10-11); パンタンマ no.626: *mDo kun las btus pa / barn po 5 /* (川越英真 (2005) p.30.16; 民族出版社 (2003) p.44.14).

<sup>299</sup>リントナー氏は第 10 章と第 11 章の間にさらに 2 章を設け、計 13 章に分ける。Lindtner, Chr. (1982) pp.173.28-175.7.

<sup>300</sup>具体的経典名、引用される個所に関しては: Lindtner, Chr. (1982) pp.175-178; 一島正真 (1990) pp.303-307.

<sup>301</sup>Lindtner, Chr. (1982) p.172.note 166.

<sup>302</sup>*ibid.* pp.11.5-11.12, 172-178.

<sup>303</sup>Obermüller, E. (1932) p.125.35-36.

<sup>304</sup>一島正真 (1990) p.302.lower 9-11.

<sup>296</sup>de La Vallée Poussin, L. (1903-1913) p.41.note 8; Lindtner, Chr. (1982) p.189.note 11-13.

LAS が引用されるのは第9章に1回、第10章に3回の計4回である<sup>305</sup>。それらは順に LAS II-179 (= X-25)；II-203 前、II-139 前、II-138 後に当たる。テキストとしては4箇所とも、引用テキストと LAS テキストでほぼ一致している。これらはいずれも LAS 第2章からの引用である。以下に、これら4箇所の引用部と LAS の対応箇所を挙げる。順に、SS の漢訳、チベット訳<sup>306</sup>、LAS のサンسكريット、漢訳3本。

#### 引用部 1

[入楞伽經頌云] 我不觀寂靜 亦不起行相 復無分別心 故我証涅槃

：大正 1635, pp.64, 下 22-64, 下 25.

(P A222b2, D K1188b) [Lañ kar<sup>307</sup> gśeṅ pa'i (D 188b6) mdo las kyañ /<sup>308</sup>]

bya ba dañ ni (P 222b3) mtshan ūid dañ // dños por nya ñan ña mi 'da' //

rnam rtog nam par śes pa las //<sup>309</sup> bzlog pas nya ñan ña 'das so //

[śes gsuñs so //] (P no.5330, D no.3934)

LAS II-179(= X-25)

nāhaṃ nirvāmi bhāvena kriyayā lakṣaṇena ca /

vikalpa-hetu-vijñāne nirvṛte nirvṛto hy ahaṃ // II-179 //

：Nanjio, B. (1923) p.127.8-9.

nāhaṃ nirvāmi bhāvena kriyayā lakṣaṇena ca /

vikalpa-hetu-vijñāna-nirvṛter nirvṛto hy ahaṃ // X-25 //

：Nanjio, B. (1923) p.267.6-7.

我不涅槃性 所作及與相 妄想爾炎識 此滅我涅槃：大正 670, p.496, 中 1-2.

我不涅槃性 亦不捨作相 軀滅虛妄心 故言得涅槃：大正 671, p.538, 下 11-12.

我不入涅槃 不滅諸相業 滅諸分別識 此是我涅槃：大正 671, p.565, 下 22-23.

我不以自性 及以於作相 分別境識滅 如是說涅槃：大正 672, p.606, 上 10-11.

#### 引用部 2

[入楞伽經頌云] 諸煩惱種子入三摩地三摩鉢底。如實覺了住無漏界。復入聲聞緣覺無漏界中。出世勝行圓滿成弁。得不思議法身自在如來。

：大正 1635, pp.65, 中 22-65, 中 26.

(P 224b3, D 190b3) [phags pa Lañ kar<sup>310</sup> (D 190b4) gśeṅ pa'i mdo las kyañ /]

ñan thos dañ / rañ sañ (P 224b4) rgyas mams bag chags kyis<sup>311</sup> ñes pa dañ / tiñ

<sup>305</sup>大正 1635, pp.64, 下 22-64, 下 25, 65, 中 22-65, 中 26, 70, 下 7-71, 上 7, 71, 上 11-71, 上 13, リントナー氏はチベット訳の当該箇所を示す。Lindner, Chr. (1982) p.176.25. しかしこれらが LAS のどの箇所に相当するのかは、これまでの諸研究では明らかになっておらず、今回初めて明らかになった。

<sup>306</sup>P と D を利用して筆者が校訂したもの。残念ながら紙刊の校訂本 Pasādika, Bh. (1989) は、論文を書き上げた後に入手したため利用できなかった。

<sup>307</sup>Lañ kar D / La ñkar P

<sup>308</sup>// D / om. P

<sup>309</sup>// D / P

<sup>310</sup>Lañ kar D / La ñkar P

<sup>311</sup>kyis P / kyī D

ie 'dzin gyis myos pa med par gyur nas / zag pa med<sup>312</sup> pa'i dbyinis nas slar sad de / yan jig rten gyi dañ / jig rten las 'das pa zag pa med pa'i (P 224b5) dbyinis (D 190b5) su gtoṅs pa'i tshogs mams yoñs su rdzogs pa<sup>313</sup> bkañ nas / chos kyī sku beam gyis mi khyab pa la dbañ med par rab tu thob par 'gyur ro /<sup>314</sup> [śes gsuñs so //]

#### LAS II-203 前

te vāsānā-dōṣa-samādhi-madābhāvād anāsrava-dhātau pratibudhyante / punar api lokōttarānāsrava-dhātu-paryāpannān sambhārān paṇipūryācintya-dharma-kāya-vāśa-vartitaṃ pratilapsyante //: Nanjio, B. (1923) p.134.12-15.

彼一切起煩悩過習氣斷。三昧染味著非性。無漏界覺。覺已復入出世間上上無漏界。

滿足來具。嘗得如來不思議自在法身。：大正 670, p.497, 中 18-21.

爾時離於諸過。三昧無漏。證法覺已修行出世間無漏界中一切功德。修行已得不可思議自在法身。：大正 671, p.540, 上 18-20.

是時乃離三昧所醉。於無漏界而得覺悟已。於出世上上無漏界中修諸功德。普使滿足。不思議自在法身。：大正 672, p.607, 上 24-26.

#### 引用部 3

[如入楞伽經中。] 大慧菩薩問如來藏。仏言。大慧。何故汝今問於如來自性明亮清淨本來清淨如是之說。如來具三十二相。在一切有情身中。如無價寶為弊垢衣之所纏覆。纏覆衣纏覆亦然。彼貪瞋癡不異計執。此之垢染是無常法。是不堅牢。是不究竟。大慧白仏言。世尊。外道所說神我之語。何故不能等比如來藏語。以外道說神我是常。我能造作。離繫自在而永不滅。彼說如是神我之語。仏言。大慧外道我語不可等比如來藏語。大慧。然我所說實際涅槃無生空無相無願等諸句義。如來應供正等正覺。為諸愚者令離無我驚怖之法。故以方便說無分別無所對碍如來藏門。此中亦非未來現在。諸菩薩摩訶薩著我所作。大慧。譬如窣師取土成泥用水及繩并其工具動力所作成種種器。無我法。住法無我離分別相。故以種種勝慧方便善巧相応。或說如來藏。或說如我法。以多妙巧文句言詞譬喩而説。以是緣故外道我語不可等比如來藏語。大慧。又我所說如來藏語。但為降伏諸外道羣執我語者。故以方便說如來藏。如是等輩何故意義在無我主宰計執見中。若於三解脱門意義具足。即能速証阿耨多羅三藐三菩提果。以是義故如來應供正等正覺所說如來藏法與外道我語不可等比。是故大慧。為令外道離諸見執。使其當得隨順如來無我藏法。：大正 1635, pp.70, 下 7-71, 上 7.

(P 240a7, D 204a4) [ji ltar Lañ kar<sup>315</sup> gśeṅs (P 240a8) pa las /]

blo gros chen pos zūs pa / bcom ldan 'das kyis mdo gzan brjod pa las / de bzān<sup>316</sup>

<sup>312</sup>med D / mad P

<sup>313</sup>rdzogs par D / om. P

<sup>314</sup>// P / om. D

<sup>315</sup>Lañ kar D / La ñkar P

<sup>316</sup>bzān D / bzān P

gšegs pa'i sñiñ po gsuns pa de / bcom ldan 'das kysis<sup>317</sup> ran bžin gyis<sup>318</sup> 'od gsal bar nram par dag pas thog ma (P 240b1) nas nram par (D 204a5) dag pa ñid mtshan sun cu rtsa gñis dan ldan pa sems<sup>319</sup> can thams cad kyi<sup>320</sup> lus kyi nan na mchis par brjod do // bcom ldan 'das kysis rin po che rin than chen po gos dri ma can gyis yons su dkris pa ltar phuñ po (P 240b2) dan / khams dan / skye mched kyi gos kysis<sup>321</sup> yons su dkris pa 'dod chags dan ze sdañ dan<sup>322</sup> gti (D 204a6) mng gjis<sup>323</sup> zil gyis non pa yons su rlog pa'i dri mas dri ma can du gyur pa / rtag pa brtan pa ther zug par ni brjod na / bcom ldan 'das (P 240b3) de bžin gšegs pa'i sñiñ po smra ba 'di mu stegs khyed kyi bdag tu smra ba dan / ji lkar mi 'dra ba legs / bcom ldan 'das kysis<sup>324</sup> mu stegs byed mams kyañ rtag pa (D 204a7) byed pa yon tan meq<sup>325</sup> pa khyab pa mi 'jig pa'o // <sup>326</sup>žes bdag tu (P 240b4) smra ba ston par bgyid do // bcom ldan 'das kysis bka' stsal pa. / blo gros chen po ña'i de bžin gšegs pa'i sñiñ po bstan pa ni mu stegs byed kyi bdag tu smra ba dan mtshuns pa ma yin te / blo gros chen po de bžin gšegs pa (P 240b5) dgra bcom (D 204b1) pa yañ dag par rdzogs pa'i sans rgyas mams ni ston pa ñid dan yañ dag pa'i mtha' dan nya ñan las 'das pa dan / ma skyes pa dan / mtshan ma med pa dan / smon pa med pa la sogs pa'i tshig g'<sup>327</sup> don mams la (P 240b6) de bžin gšegs pa'i sñiñ por bstan par byas nas / byis pa mams bdag med pas (D 204b2) 'jig par 'gyur ba'i gnas mnam par spañ ba'i don du de bžin gšegs pa'i sñiñ po'i sgo bstan pas nram par mi rlog pa'i gnas (P 240b7) snañ ba med pa'i spyod yul ston te / 'di la blo gros chen po ma 'ons pa dan da lkar byuñ ba'i byañ chub sems dpa' sems dpa' chen po mams kysis bdag tu mñon par žen par mi (D 204b3) bya'o // blo gros chen po dper na / rdza (P 240b8) mkhan ni 'jim pa'i rdul gyi phuñ po goig las lag pa dan bzo dan lag zuñs dan / chu dan srad bu dan nan tan dan ldan pa las / snod nram pa sna tshogs byed do // blo gros chen po de bžin du de bžin gšegs pa (P 241a1) mams kyañ chos la bdag med pa nram par rlog (D 204b4) pa'i mtshan ñid thams cad nram par log pa'i de bžin ñid šes rab dan / thabs la mkhas pa dan ldan pa sna tshogs kysis<sup>328</sup> de bžin gšegs pa'i sñiñ (P 241a2) por bstan pa'am / bdag med par bstan pas kyañ rui ste rdza mkhan bžin du tshig dan yi ge'i nram grañs nram

317 kysis D / kyi P  
318 gyis D / gyas P  
319 sems D / sauns P  
320 kyi D / om. P  
321 kysis D / om. P  
322 dan D / om. P  
323 gis D / gi P  
324 kysis P / om. D  
325 med D / byed P  
326 // P / om. D  
327 gi D / gis P  
328 kysis D / gyis P

pa sna tshogs kysis ston to<sup>329</sup> // <sup>330</sup>des na de'i phyr blo (D 204b5) gros chen po de bžin gšegs pa'i sñiñ po bstan pa mu (P 241a3) stegs byed kyi bdag tu smra ba'i<sup>331</sup> bstan pa dan mi 'dra'o // <sup>332</sup>blo gros chen po de ltar de bžin gšegs pa mams mu stegs byed bdag tu smra ba la mñon par žen pa mams drañ ba'i phyr de bžin gšegs pa'i<sup>333</sup> sñiñ po bstan pas de bžin (P 241a4) gšegs pa'i sñiñ po (D 204b6) ston te / yañ dag pa ma yin pa'i<sup>334</sup> bdag tu nram par rlog pa'i lta bar ltuñ ba'i beam pa can dag<sup>335</sup> nram par thar pa gsum gyi spyod yul la gnas pa'i beam pa dan ldan pas myur du bla na med pa yañ dag par (P 241a5) rdzogs pa'i byañ chub mñon par rdzogs par 'tshañ rgya bar ji lkar 'gyur žes te / blo gros chen po de'i don du de (D 204b7) bžin gšegs pa dgra bcos pa yañ dag par rdzogs pa'i sans rgyas mams de bžin gšegs pa'i sñiñ po (P 241a6) ston pa mdzad do // de lta bes na 'di ni mu stegs byed bdag tu smra ba dan mtshuns pa ma yin no // blo gros chen po de bas na mu stegs byed kyi lta ba nram par bzlog pa'i phyr / de bžin gšegs (D 205a1) pa'i sñiñ po bdag med (P 241a7) pa'i rjes su 'jug par bya'o //

L.A.S II-139 前

mahāmātir bodhi-sattvo mahā-sattvo bhagavāntam etad avocat / tathāgata-garbhāḥ punar bhagavatā sūtrānta-peṭhe 'nuvaritāḥ / sa ca kila tvayā prakṛti-prabhāsvara-viśuddhy-ādi-viśuddha eva varīyate dvātrīṃśā-lakṣaṇa-dharaḥ sarva-sattva-dehāntar-gato mahārgha-mūlyā-rātnam alina-vastu-pariveṣṭitam iva skandha-dhātva-āyatana-vastu-veṣṭito rāga-dveṣa-mohābhūta-parikalpam alam alino nityo dhruvaḥ śīvaḥ śāśvatas ca bhagavatā varṇitāḥ / tat katham ayaṅ bhagavaṃs tūrtha-karā-tma-vāda-tulyas tathāgata-garbhā-vādo na bhavati / tūrtha-karā api bhagavan nityaḥ kartā nirguṇo vibhūr avyaya ity ātma-vādoḍeśam kurvanti // bhagavān āha / na hi mahāmāte tūrtha-karātma-vāda-tulyo mama tathāgata-garbhōḍeśaḥ / kiṃ tu mahāmāte tathāgatāḥ śūnyatā-bhūta-koṭi-nirvāṇānupādānimitāprāṇihitādyānām mahāmāte padārthānām tathāgata-garbhōḍeśam kṛtvā tathāgatā arhantaḥ sam-mahāmāte padārthānām tathāgata-garbhā-mukhōḍeśena deśayanti / na cātra mahāmāte ābhāsa-gocaraḥ bālānām nairātmya-saṃtrāsa-pada-vivajitārtham nirvikalpa-nir-aṅgata-pratyuppannāḥ bodhi-sattvair mahā-sattvair ātmābhīniveśaḥ kartavyaḥ / tad yathā mahāmāte kumbha-kāra ekasman mīt-paramāṇu-rāsēr vividhāni bhāñjāni karoti hasta-śīpa-daṅḍōḍaka-sūtra-prayātna-yogāt evam eva mahāmāte tathāgatās tad eva dharmā-nairātmyam sarva-vikalpa-lakṣaṇa-vinivṛtāṃ vividhāḥ prañōḍpāya-kausalya-yogair garbhōḍeśena vā nairātmyōḍeśena vā kumbha-kāra-vac citraḥ

329 to P / te D  
330 // P / om. D  
331 ba'i P / ba D  
332 // D // P  
333 pa'i D / pas P  
334 pa'i D / om. P  
335 dag D / bdag P

pada-vyaujana-paryāyair dśayaute / etasmāt kārāṇā mahāmāte ūrtha-karātmavāḍopadeśa-tulya tathāgata-garbhōpadeśo na bhavati / evaṃ hi mahāmāte tathāgata-garbhōpadeśam ātra-vādābhiniṣṭhānam ūrtha-kārāṇām ākaṣṣānārtham tathāgata-garbhōpadeśena nirdīśanti / katham vatābhūtātma-vikalpa-dṣṭi-patīśāśyā vimokṣa-traya-gocara-patīśāśyōpetāḥ kṣipram anuttarām samyak-sambodhim abhisambudhyerann iti / etad artham mahāmāte tathāgatā arhantaḥ samyak-sambuddhāḥ tathāgata-garbhōpadeśam kurvanti / ata etau na bhavati ūrtha-karātmavāḍa-tulyam / tasmāt tarū mahāmāte ūrtha-kara-dṣṭi-viniṣṭy-arttham tathāgata-nairātmya-garbhānusārīṇā ca te bhavitavyam //

: Nanjio, B. (1923) pp.77.13-79.9.

大慧菩薩摩訶薩白仏言。世尊。世尊修多羅說如來藏自性清淨。轉三十二相。入於一切衆生身中。如大伽藍坵衣所纏。如來之藏常住不變。亦復如是。而陰界入坵衣所纏。貪欲恚癡不妄妄想塵勞所汚。一切諸仏之所演說。云何世尊。同外道說我言有如來藏耶。世尊。外道亦說有常作者離於求那周遍不滅。世尊。彼說有我。仏告。大慧。我說如來藏。不同外道所說之我。大慧。有時說空無相無願如實際法性法身涅槃離自性不生不滅本來寂靜自性涅槃。如是等句。說如來藏已。如來心供等正覺。為斷愚夫畏無我句故。說離妄想無所有境界如來藏門。大慧。未來現在菩薩摩訶薩。不応作我見計著。譬如陶家於一泥聚以人工水木輪繩方便作種種器。如來亦復如是。於法無我離一切妄想相。以種種智慧善巧方便。或說如來藏。或說無我。以是因緣說如來藏。不同外道所說之我。是名說如來藏。開引計我諸外道說如來藏。令離不妄我見妄想。入三解脱門境界。\*希望疾得阿耨多羅三藐三菩提。是故如來心供等正覺。作如是說。如來之藏若不如是則同外道所說之我。是故大慧。為離外道見故。當依無我如來之藏。

: 大正 670, p.489. 上 22-中 20.

聖者大慧菩薩摩訶薩白仏言。世尊。世尊。如修多羅說。如來藏自性清淨。具三十二相。在於一切衆生身中。為貪瞋癡不妄坵染陰界入衣之所纏裹。如無伽藍坵衣所纏。如來世尊復說常恒清涼不變。世尊。若爾外道亦說我有神我常在不變。如來亦說如來藏常乃至不變。世尊。外道亦說有常作者。不依諸緣自然而有周遍不滅。若如是者。如來外道說無差別。仏告聖者大慧菩薩言。大慧。我說如來藏。不同外道所有神我。大慧。我說如來藏空實際涅槃不生不滅無相無願等文辭章句。說名如來藏。而如來藏無所分別遍知。為諸一切愚癡凡夫。聞說無我生於驚怖。是故我說有如來藏。大慧。如來心正寂靜無相。說名如來藏。大慧。未來現在菩薩摩訶薩。不応執著有我之相。大慧。譬如陶師依於泥聚微塵輪繩。人工手木方便作種種器。或說無我。或說實際及涅槃等。種種法無我離諸一切分別之相。智慧巧便說名如來藏。或說無我。或說實際及涅槃等。種種名字章句示現。如彼陶師作種種器。是故大慧。我說如來藏不同外道說有我相。大慧。我說如來藏者。為諸外道執著於我。採取彼故說如來藏。令彼外道離於神我妄想見心執著之處。入三解脱門。速得阿耨多羅三藐三菩提。大慧。以是義故。諸仏如來心正遍知說如來藏。是故我說有如來藏。不同外道執著神我。是故大慧。為離一切外道邪見。諸仏如來作如是說。汝當修學如來無我相法。: 大正 671, p.529. 中 18-下 18.

大慧菩薩摩訶薩白仏言。世尊。修多羅中說如來藏本性清淨。常恒不斷無有變易。具三十二相。在於一切衆生身中。為羶界處坵垢衣所纏。貪恚癡等妄分別坵之所汚染。如無伽藍坵衣中。外道說我是常作者。離於求那自在無滅。世尊所說如來藏義。豈不同於外道我耶。仏言。大慧。我說如來藏。不同外道所說之我。大慧。如來心正等覺。以性空實際涅槃不生無相無願等諸句義。說如來藏。為令愚夫離無我怖。說無分別無影像處如來藏門。未來現在菩薩摩訶薩。不応於此執著於我。大慧。譬如陶師於泥聚中以人工水木輪繩方便作種種器。如來亦爾。於遠離一切分別相無我法中。以種種智慧方便善巧。或說如來藏。或說為無我。種種名字各各差別。大慧。我說如來藏。為攝著我諸外道衆。令離妄見入三解脱。速得証於阿耨多羅三藐三菩提。是故諸仏說如來藏。不同外道所說之我。若欲離於外道見者。當知無我如來藏義。: 大正 672, p.599. 中 8-28.

## 引用部 4

[此經又云。] 大慧。此空無生無二無自性相。普撰一切諸仏及一切經典故。

: 大正 1635, pp.71. 上 11-71. 上 13.

(P 241a8, D 205a2) [yaṃ boom (P 241b1) idan 'das kyis Lan kar<sup>338</sup> gśeḡs pa de ūid las bka' stsal ba /]

blo gros chen po stoṅ pa ūid dan skye ba med pa dan giūs (D 205a3) ma yin pa dan ran bān med pa'i miṣhan ūid ni saṅs rgyas thams cad kyī mdo sdā'i nan du 'dus so //<sup>337</sup> (P 241b2) [zēs grunis so //]

LAS II-138 後

etad dhi mahāmāte ūnyatānūtpādāvaya-niṣvabhāva-lakṣaṇam sarva-buddhānām sarva-sūtrānta[ḥ]-gatam : Nanjio, B. (1923) p.77.3-4.

大慧。空無生無二離自性相。普入諸仏一切修多羅。: 大正 670, p.489. 上 10-11.

大慧。一切法空不生無體不二相。入於諸仏如來所說修多羅中。

: 大正 671, p.529. 中 9-11.

大慧。此空無生無自性無二相。悉入一切諸仏所說修多羅中。: 大正 672, p.599. 中 1-3.

4 回の引用箇所のうち、最初のものは LAS においては「アーラヤ識」など「八識」を説く中に出てくる偶頌であり、2 つ目のものは第 2 章の最後にあつて「一乘」や「三乘」を説く中の一節であり、3 つ目は「アートルマン」と「如來藏」を説く部分であり、最後は「空性」、「不生」、「無二」、「無自性」を説く中の一節である。LAS の成立時期に関してはまだ定説をみないが、少なくとも、LAS において「アーラヤ識」、「八識」、「如來藏」を説いた箇所はナーガールジュナよりも後の成立であるといえる。それゆえ、それらを引用する SS も、ナーガールジュナ以後の成立だといえよう。

これ以上の年代の特定は難しいが、これまでの研究者による説を紹介すると、佐々木孝憲氏は、「中観の祖としての龍樹の作とは認め難い」<sup>338</sup>とし、また一島正真氏は、当

<sup>336</sup>Lan kar D / La rkar P

<sup>337</sup>// P / om. D

<sup>338</sup>佐々木孝憲 (1965) p.183.lower 4.

初「無着と同じ位の年代に活躍し、無相唯識的立場をもつ龍樹」<sup>339</sup>と述べていたが、引用経典の詳細な調査後、「世親以後に活躍した第二の竜樹」<sup>340</sup>あるいは「もし『楞伽經』の成立をかりに世親 (ca.320-400)以後と推定すれば、『經集』の作者竜樹は、世親と月称 (ca.650-700)の間に活躍した竜樹である」<sup>341</sup>と述べる。

ここで少し話を戻して、本書とシャーンティデーヴァの諸著作との関係について触れておかねばならない<sup>342</sup>。プトゥンム教史によれば、シャーンティデーヴァにはŚikṣāsamuccaya, Sūtrasamuccaya, Bodhicaryāvatāra という三部作があったという<sup>343</sup>。これらのうちŚikṣāsamuccaya と Bodhicaryāvatāra は梵藏漢のテキストが存在し、シャーンティデーヴァ作とされるものが伝わっているが、Sūtrasamuccaya に関しては、同タイトルで、これまでみてきたナーガールジュナ作のものしか伝わっていない。ドゥ・ヨング氏はデンカル目録にある mDo sde sna tshogs kyi mdo btus pa (no.657)<sup>344</sup>が、シャーンティデーヴァの Sūtrasamuccaya である可能性を指摘する<sup>345</sup>。この直後には現在に伝わる Sūtrasamuccaya (no.658)があり、また前後にはŚikṣāsamuccaya (no.655)と Bodhicaryāvatāra (no.659)も記載されている。一方で、バンタンマ目録の記述はこれとは異なり、ナーガールジュナの Sūtrasamuccaya (no.626)<sup>346</sup>は記載されているが mDo sde sna tshogs kyi mdo btus pa という作品の記載はない。はたしてシャーンティデーヴァによる Sūtrasamuccaya とする作品があったのかどうか、その鍵となるのが Bodhicaryāvatāra にある以下の記述である。ひとまずこれらの和訳として、一鳥氏のものを挙げておく。

śikṣāsamuccayo 'vasyaṃ draṣṭavyaś ca punaḥ punaḥ /  
vistaraṇa sadācāro yasmād atra pradarsitāḥ // V-105 //  
saṃkṣepaṇātha vā tāvat paśyet sūtrasamuccayam /  
ārya-nāgarjūnābaddhaṃ dvitīyaṃ ca prayatnataḥ // V-106 // 347  
yato nivāryate yatra yad eva ca niyujyate /  
tal loka-citta-raksārtham śikṣāṃ dṣṭvā samācāret // V-107 // 348

〔105〕また集菩薩學論 (Śikṣāsamuccaya) は、必ず繰り返し見し見るべきである。なぜなら、正しい行法が、そこにくわしく示されているから。(106) 或は簡単に、まづ經集 (Sūtrasamuccaya) を見よ。そして聖竜樹の作を、第2に、努力して〔読め〕。(107) そこに、避くべきことと、なさねばならぬことが〔しるされて〕ある。ゆえに、その学処を見て、世の人々の心を守護するために、修行せよ。〕<sup>349</sup>

<sup>339</sup> 一鳥正男 (1968) p.370.lower 11-12.

<sup>340</sup> 一鳥正真 (1986\*) p.29.lower 3.

<sup>341</sup> 一鳥正真 (1990) p.303.upper 1-3.

<sup>342</sup> 詳しくは、Banerjee, A. (1941) pp.125.17-126.30; Fillozat, J. (1964); 佐々木孝憲 (1965); 一鳥正男 (1968) p.371.upper 1-lower 15; 一鳥正真 (1986) pp.2.8-8.21; 一鳥正真 (1986\*) pp.29.lower 15-30.upper 11.

<sup>343</sup> Obermiller, E. (1932) p.163.2-28.

<sup>344</sup> 2100 sloka / 7 barn po: Lalou, M (1953) p.335.9-10.

<sup>345</sup> de Jong, J. W. (1975) p.182.9-20; 『東伝典 III』p.288.14-268.6.

<sup>346</sup> barn po 5: 民族出版社 (2003) p.44.14; 川越英真 (2005) p.30.16.

<sup>347</sup> Fillozat, J. (1964) p.473.17-20.

<sup>348</sup> ibid. p.476.31-32.

<sup>349</sup> 一鳥正真 (1986) p.1.13-17.

一鳥正真氏はこの記述を、「集菩薩學論を読んだあと、寂天自身が書いた短編の經集を見よとなる。そして同名の竜樹による經集を第2に努力して読めと解することができよう」とする。つまりここではシャーンティデーヴァによるŚikṣāsamuccaya と Sūtrasamuccaya およびナーガールジュナによる Sūtrasamuccaya の3書に言及があるものとするのである。これらのうちシャーンティデーヴァの Sūtrasamuccaya のみテキストが存在しないが、これを一鳥氏は、「寂天は竜樹による經集を参考としながら後に菩提行經を造る準備をし、自から簡単な經集を造り、集菩薩學論を著述したように思われる」<sup>350</sup>とする。同氏は106dの dvitīyam を「第2に」と副詞的に訳しているが、「第2の『經集』」を sūtrasamuccayam を補って解釈することもできよう。同様の読みは、ドゥ・ラ・ヴァレ・プレン氏、フイノ氏<sup>351</sup>、パネルジュエー氏<sup>352</sup>にもみられる。この箇所解釈に関してはこれまで諸説あったが<sup>353</sup>、サンズクリットの読みとしては、前半に *atha vā*、後半に *ca* があることから第106偈が2つの文から構成されていると考えれば、ひとまずは一鳥氏らのものが妥当だといえよう。

現存する SS がシャーンティデーヴァによるものではなく、真作ではないにしてもナーガールジュナに帰せられるものだという根拠は、佐々木氏によっても明らかになっている。先にみた記述では、SS は Śikṣāsamuccaya の内容を簡単に読いたものだと言われているけれど、現存テキストでは、「シクシャ・サムツチャヤの引用経典はほとんどストア・サムツチャヤのものと同じ箇所を引用したものか、ストア・サムツチャヤの長いものの中の一部の引用」<sup>354</sup>となっており、また Śikṣāsamuccaya は「それら引用経典の間に論説を加えて形を整えている点から、或いはシクシャ・サムツチャヤより前に

<sup>350</sup> ibid. p.8.20-21.

<sup>351</sup> 阿氏の読みに関して: Fillozat, J. (1964) p.474.22-25.

<sup>352</sup> Banerjee, A. (1941) p.126.5-30.

<sup>353</sup> フイノ氏は、それまでの諸研究者の解釈を紹介した上で、自身は < 105. Le Recueil des instructions (Śikṣāsamuccaya) est obligatoirement à examiner encore et encore, puisqu'il est décrit en détail la conduite des bons; 106. ou bien cependant, comme résumé, on peut voir avec soin le Recueil de lectures (Sūtrasamuccaya) formé par le Noble Nāgārjuna et deuxième. > (Fillozat, J. (1964) p.475.21-25) と読み、ここで触れられているのはシャーンティデーヴァの Śikṣāsamuccaya とナーガールジュナの SS という2書のみである、と解釈する。芥藤明氏や石田智宏氏も同様の読みをする(芥藤明 (2001) pp.3.6-4.4. Ishihara, Ch (1988) p.35.3-24)。また、チベットの訳でも解釈が分かれることを、斎藤氏は指摘する(斎藤明 (2001) pp.4.5-5.9)。106d の dvitīyam が北原とナルタン版では *grīs pa* となっているのに対し、デルグ版などでは *grīs po 'arā* となっているという。後者はサンズクリットとは異なる読みであり、さらにアラジニヤールカマティによる注釈では、106cd に対して *ārya-nāgārjuna-pādaḥ nibaddhaṃ dvitīyam śikṣāsamuccayam sūtrasamuccayam ca paśyet prayatnataḥ ādarataḥ / yad iha na dṛṣyate tat tatra dṛṣyata iti bhāṣāḥ* // と注釈されているが、dvitīyam に関しては、「第2の Śikṣāsamuccaya と『第2の』 Sūtrasamuccaya」なのか、[Śikṣāsamuccaya と Sūtrasamuccaya のうちの、第2]つまり後者の Sūtrasamuccaya だけを指しているのか、研究者の間で解釈が分かれる (Fillozat, J. (1964) pp.475.37-476.36; 一鳥正真 (1986) p.3.2-14; 斎藤明 (2001) p.5.11-24)。しかしサンズクリットの読みとしては前者が正しく、アラジニヤールカマティは、シャーンティデーヴァによる両書とナーガールジュナによる両書との4作品が存在していたと考えたようである。このように解釈するとき、一鳥氏はその後に出くばる中の、*iha* が Bodhicaryāvatāra を、*tatra* が SS を指すとしている(一鳥正真 (1986) p.3.6-10) けれど、*iha* はシャーンティデーヴァの Śikṣāsamuccaya と SS、*tatra* はナーガールジュナの Śikṣāsamuccaya と SS を指していると考えられる。

<sup>354</sup> 佐々木孝憲 (1965) p.182.lower 10-12.

ストラ・サムツチャヤがあった<sup>355</sup>と考えられる。それゆえ、現存の SS は、シャーンティデーヴァによるものではなく、彼以前に著されたものと考えられるのである。

しかし、上に確認した読みをくつがえす指摘が、斎藤氏によってなされた<sup>356</sup>。それは同時に、シャーンティデーヴァには Śikṣāsamuccaya, Sūtrasamuccaya, Bodhicaryāvatāra という三部作があったといわれ、その信憑性を揺るがすものである。すなわち同氏の指摘によって、シャーンティデーヴァ作といえるのは Śikṣāsamuccaya のみであって、残りの Sūtrasamuccaya はナーガールジュナ作とされ、以下に触れる教壇本に当たらないか、また最後の Bodhicaryāvatāra についても原本（以下に触れる教壇本）に当たらないか、あるいはクシャヤマティ (\*Akṣayamati) という人物の手によるものである可能性が出てきた。Bodhicaryāvatāra には現行本のほかに敦煌本があり、前者はシャーンティデーヴァ作とされ、後者は作者をクシャヤマティと伝えるのである。そして敦煌本は現行本より古形を保つことが指摘されている。問題の箇所に関しては、現行本の V 104-106 が敦煌本の IV 90-91 に対応しており、斎藤氏は、前者の第 105 偈は後の挿入であって、それにとりまき第 104 偈と第 106 偈も改編されたかと推理する。問題の第 106 偈の読みがさまざまに取れるのも、この改編のためであると考えれば説明できよう。詳細は同氏の論文に譲るとして、結局第 106 偈は次のように読める。

「あるいはまた、簡単に、まず、聖ナーガールジュナによって編まれた第 2 のものである『經典集成』を熱心に見るべきである。」<sup>357</sup>

この箇所の読みに関する問題は、これで解決されたといつてよいのではないだろうか。これによって、Śikṣāsamuccaya と Sūtrasamuccaya に関しては、シャーンティデーヴァによる前者とナーガールジュナによる後者という、それぞれ 1 本づつしか存在していないことになる。これら両書は現存しており、これら以外に失われた著作を想定する必要はなくなつて、うまく説明がつく。

ちなみに、斎藤氏は SS の著者に関しては、一島氏の研究をもとに、「現行本全体の著者を、『中論』の著者ナーガールジュナに比定することは不可能である」<sup>358</sup>とする。ところで、チャンドラキールティの \*Madhyamakāśāstrastuti に記述のある SS に関して、瓜生津隆真氏は大胆な推測を立てる。同氏はこの Sūtrasamuccaya とは『十住毘婆沙論』の偈頌部分を指したものでないかと推測する<sup>359</sup>。これは興味深い見解であり、今後そのことを証明する根拠がみつければ、チャンドラキールティの伝承の信頼性も回復されよう。ちなみに『十住毘婆沙論』の偈頌部分とここで扱った現存の SS とは内容的に一致せず、両者は別のものと考えなくてはならない。

<sup>355</sup> *ibid.*, p.182.lower 12-14.

<sup>356</sup> 斎藤明 (2001)、関連論文として、斎藤明 (1986\*\*).

<sup>357</sup> *ibid.*, p.3.20-21

<sup>358</sup> *ibid.*, p.2.10-11

<sup>359</sup> 瓜生津隆真 (2004) pp.66.16-67.13, 85.12-90.8.

## XIV. 『十二門論』 \**Dvādaśamukhaśāstra* (DŚ)

本書は漢訳 (大正 1568) のみ存在する。鳩摩羅什により 409 年に訳出されたもので、全体で 12 章、26 の偈頌とそれらに対する注釈文とからなり、MK の思想が簡潔にまとめられている。26 偈中では MK や SS からの引用が含まれるほか、注釈文には、ともに MK の注釈である『無畏』や青目注を、利用あるいは引用したと思われる箇所が多くあり、さらには SS の自注 (P no.5231) や VV に類似した記述もみられる<sup>360</sup>。このことから、本書はナーガールジュナによるものとは考えられず、五島清隆氏によれば、青目か鳩摩羅什、あるいは両者の間に位置する第三者の手によるものであるという<sup>361</sup>。

安井広済氏も本書の真作性に疑問を呈した<sup>362</sup>。同氏は特に、本書第 8 章中の MK XIII-3 の引用に関して、青目や安慧がそれぞれの MK 注釈中でそう解釈しているように、本書でもこの偈はナーガールジュナの主張を述べた偈とされているが、一方で『無畏』の著者、チャンドラキールティ、ブツダパーリタ、パーヴィヴェーカからは、それぞれの MK 注釈中でこれを反対論者の偈として指し、したがって後者は中編派の本流であるにもかかわらず本書 (DŚ) の存在を知らなかったと考えざるをえず、DŚ の著者に疑問が生じる旨を示す。この偈が「ナーガールジュナの主張を述べた偈」だという点に関しては、五島氏によって次のように訂正がなされている。『十二門論』の著者が『中論頌』の作者たる龍樹でないことは、現在ではほぼ確実なこととされているが、既に見てきたように、『十二門論』の著者は、『中論頌』の偈を自由に引用、転用し、また、後述するように、自由にアレンジしているから、この偈の冒頭偈への採用も、『中論頌』での文脈を無視した、一種の転用と考えるべきであろう。冒頭偈として『中論頌』から引用する場合、各章の主題を提示するにふさわしいものであれば、もとの『中論頌』における意義は、『十二門論』の著者にとつては二義的なものであったと思われるからである。また、すでに論じたように、『十二門論』の著者は、『無畏論』と『青目註』とを自由に比較勘案して引用しているから、何の不思議もないことである」<sup>363</sup>と。

ちなみにリントナー氏は、詳しい論証は保留しながらも、ほぼすべての偈頌がナーガールジュナによって著されたことは疑いないが注釈部分は青目によるものとし、偽作とする<sup>364</sup>。またガード氏も、偈頌はナーガールジュナによるものであるが、それらの編集および注釈を行ったのは青目だとする<sup>365</sup>。一方で Hsueh-li Cheng 氏は、MK との内容と形式 (philosophical reasoning, religious assertion and literary style)<sup>366</sup> に関する類似から本書は真作だとしているが、上のような検証は行っておらず、根拠に乏しい<sup>367</sup>。

<sup>360</sup> 五島清隆 (2002).

<sup>361</sup> *ibid.*, pp.459.20-461.20. また章ごとの問題点が、同氏によってまとめられている。五島清隆 (2004).

<sup>362</sup> 安井広済 (1961) pp.374-383.

<sup>363</sup> 五島清隆 (2002\*) p.89.13-22.

<sup>364</sup> Lindtner, Chr. (1982) p.11.note 13.

<sup>365</sup> Gard, Richard A. (1954).

<sup>366</sup> Hsueh-li Cheng (1982) p.27.9-16.

<sup>367</sup> この研究に関してはいくつもの書評がある: Werner, K. (1983); ロバート・P・ローズ (1984); de Jong,

## 4. まとめ

ナーガールジュエナの著作としてまず基準となる作品はMKである。われわれはMKが真作であることを前提として、諸著作の真偽性を判定していくことになる。

まずSSは、チャンドラキールティがMKから派生したものと述べるものであり、また一方ではMKよりも相手への論駁に多くが費やされた、論理的学傾向が強いものではないが、その内容などからは真作と考えられる。

さらにVVも、MKから派生したものといわれ、「前主張」である前半部のあとに「反論」からなる後半部がくるという構成をはじめ、内容的にも、SSよりもさらに論理的学傾向が強いものである。特に注釈部分において真作性への疑問が残ったが、決定的なものではなく、ひとまず真作と認められる。

これによりさらに対論者の論理を利用した反駁が展開されるのが、VPである。この著者に関しては『唯識二十論』以後の可能性があり、偽作の疑いが濃厚であるけれども、説明すべき点も多く残されているため、ひとまず真作としておく。今後はテキストの整備とともに、論理学に関する諸文献との比較検討がなされる。

VSにも論理学の形式にのっとった論述がうかがえる。ただ、この著作は伝承に乏しく、かつ現在得られるテキストはおおそく部分的なものであって、真偽性を判定するのに十分な情報があるとはいえないが、ひとまず真作としておく。

一方でYSは、これら論理的学な著作とは性格をやや異にし、MKの哲学のおよび道徳的な側面を展開したものである。そこには空や縁起が詳しく説かれるなど、ナーガールジュエナの思想がよく表わされており、真作と考えられる。

この著作の流れを引き継ぐのが、より倫理的で実践的性格の強い、RAとSLである。これらは在家者の日常生活に触れた内容からも、王に宛てた書簡という形式からも、世俗的な色彩が濃い。ただ、MKの思想のちりばめられたRAに対して、SLには哲学的記述がほとんどみられず、この点で、SLの真作性には疑いが残る。

また十二支縁起を取った、哲学的な内容をもつPHは、MKの流れを、そして菩薩道の実践を説いたBSは、YSの流れを引き継いだものといえよう。

さらにMVも、MKやRAと形式的にも内容的にも類似しており、「唯心」という表現など何点か問題もあるけれど、ひとまず真作と認められる。

BVには、唯識的要素がみられるなど、どうして真作とみなすことはできない。

SSには、Lankāvatārasūtraからの引用があり、少なくとも唯識説を知っていた人物によるものといえ、真作とは認められない。

CSに関しては、それを構成する4つの讃歌ごとに真偽性を検討していかねばならないが、いずれも今のところ真作と認められる。これらはMKと同様の思想内容と、讃歌という日常実践的な形式をあわせもつ。ブッダの言葉をかきとり作者の思想が述べられる点は、他の著作にはない特殊なものといえる。さらにこれらはMKと比べて作者の表現の熟達を感じさせ、比喩を多用して分かりやすく簡潔に説かれているほか、4つのうち

特にNsとAsに関しては、後代の思想に通じる表現がみられることから、CSの諸讃歌はナーガールジュエナ晩年の著作ではないかと思われる。あるいはNsやAsにみられる表現は、後代のもの可能性も否定できず、さらに慎重な検討を要する。

それら以外の諸讃歌で真作の可能性の濃厚なものは、*Stūtyāṅgastava*である。これはMKと形式的にも内容的にも類似しており、さらにはLsやAsに非常に近いもので、なぜCSに含まれていないのか不思議なほどである。こうした真作の可能性の高い諸讃歌には、共通した特徴がある。それはまず、これらの讃歌は知意の完成 (*prajñāpāramitā*) やターラー (*Tārā*) などを称えたものではなく、ブッダ自身を称えたものであること。ついで、単に神話的要素を列挙したり、ブッダのすばらしさを称えただけのものではなく、ブッダの言葉をかきとりなど何らかの形で、MKと共通した「縁起即空」の思想が述べられたものであること。以上の2点が挙げられる。これらは単にブッダなどを称えただけの讃歌とは趣を異にし、思想的な内容を伴ったものであって、大乘運動における讃歌に発展段階があるとするとすれば、讃歌という形式を利用して自らの思想を述べ、発展した段階にあるといえよう。この段階の讃歌は、論書とも経典とも異なる、特殊なジャンルである。

以上みてきた諸作品を、「真作と考えられるもの」、「ひとまず真作と考えたよいいもの」、「偽作と考えられるもの」に分類して示す。「ひとまず真作と考えたよいいもの」には、偽作の疑いはあるもののいまだ説明されていないもの、情報が少なく判断できないものなどを含める。

<真作と考えられるもの>

MK, SS, YS, RA, PH, BS, Ls, Ps, Stūtyāṅgastava.

<ひとまず真作と考えたよいいもの>

VV, VP, VS, SL, MV, As, Ns, Niruttarastava (Niruttarastotra), Āryamañjuśrī-bhāṣṭārakakarṇāśītoṭra, Aṣṭamahāsthānacaitiystotra (P no.2024), Aṣṭamahāsthānacaitiystotra (P no.2025), Dhāśākāra nāma neyastotra, Vandanaśtotra.

<偽作と考えられるもの>

BV, SS, Dś, Dharmadhātustava, Cūṭavajrastava, Kāyatrayastotra, Sattvārādhana-stava (Sattvārādhanaśāstotra), Prajñāpāramitāśtotra, Narakodhara, Buddhabhāṣṭārakasya daṇḍakaurīṭena śtotra, \*Tārāśtotra, Khadiravaṇītarāśītoṭra, Śrīmahākāśyāśtā-mantrastotra (P no.2639), Śrīmahākāśyāśtāśtakraśtotra (P no.2644), Śrīmahākāśyāśtāśtamantrastotra (P no.2645), Vajramahākāśyāśtakraśtotra.

しかし、ほとんどの著作に関して、さらなる検討の必要のあることも明らかとなった。「ひとまず真作と考えたよいいもの」のうち最後の5作品は、哲学的記述がなくブッダの特質や神話的要素など名称への言及にとどまるもので、おそらくナーガールジュエナ以前のものではないかという感が否めない。

これら3分類のうち真作の可能性のある前2者を、内容の違いで分類すると、「空の思想を中心に説く哲学的なもの」、「空の思想が説かれるが論理的傾向の強いもの」、「大乘の実践を説く道徳的倫理的なもの」、「哲学的記述がなく、ブッダの特質、地名、出来

事、神話的要素などの名称への言及にとどまるもの」に分けられる。

<空の思想を中心に説く哲学的なもの>

MK, YŚ, PH, MVīra, Ls, As, Ns, Ps, *Stutyatīstava*, *Niruttarastava* (*Niruttarastōtra*).

<空の思想を説くが論理的傾向の強いもの>

ŚS, VV, VP, VS.

<大乗の実践を説く道徳的倫理的なもの>

RA, BS, SL.

<哲学的記述がなくブダの特質や神話的要素など名称への言及にとどまるもの>

*Āryamañjuśrībhāṣāraṅga-karuṇastōtra*, *Aṣṭamahāśāhānacāyastōtra* (P no.2024),  
*Aṣṭamahāśāhānacāyastōtra* (P no.2025), *Dvādasākāra nāma nayastōtra*, *Vāṇdamā-*  
*stōtra*.

第4番目に分類した5作品は、真作とはしたものの、ナーガールジュナ以前の可能性もあり、真作だとしても生涯のうち最初期の作品群といえるのではないだろうか。これら5作品を除いて、前3分類に含まれる諸作品を、以下に年代順に並べてみる。

まず、チャンドラキートルテイの言葉にしたがうと、MKからŚS, VVが派生的に作られたと考えられる。ŚSとVVの内容を比較すると、両者ともに対論者と議論する中にあって「実体(svabhāva)の否定」を説く偈が多く、VVではさらにそれが「ことば」の観点からなされる。またŚSはMKと内容的によく類似した哲学的なものではあるが、MKよりもさらに論点を絞った議論が展開されるなど、論理的著作への伏線となるような傾向がうかがえる。あえて両者に前後関係をつけるとすれば、形式的、内容的にみて、VVの方がより論理的傾向の強いものであることから、ŚS, VVの順で著されたとも考えられよう。つまりこれら3者の著作順として、順にMK、ŚS, VVと仮定しておきたい。さらにこれらは、議論の内容や語彙、表現技術などを考慮すると、生涯のうち比較的早い時期の著作ではないだろうか。またVSも、これらと同様に論理的議論のみられる著作であり、VVと同時期あたりの成立ではないかと思われる。対してVPには、『ニヤヤー・スートラ』との徹底した論争の跡がうかがえ、対論者の論理を逆手に取った巧妙な議論が展開される。もしVPが真作であるとすれば、本書のこうした性格に加え『ニヤヤー・スートラ』やナーガールジュナ作の可能性のある『方便心論』との前後関係を考慮して、生涯のうち前期よりもむしろ、中期あたりのものではないかと推測される。

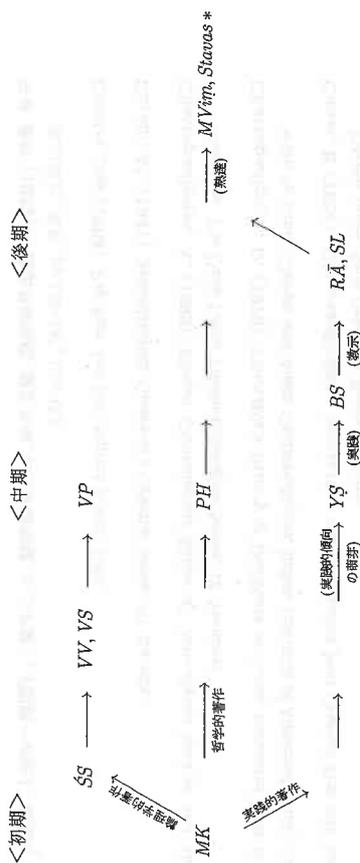
またYŚには、MKに説かれる内容のうち宗教的倫理的な側面を強調し、善悪の価値判断を含む表現が比較的多くみられる。同時に哲学的表現もみられ、「縁起」とともに「構想作用(vikalpa)の否定」が中心に説かれる。ここには、ŚSやVVのように議論によって相手を打ち負かすという性格とは別の、大乗の実践を説いていこうとする傾向がうかがえる。こうした傾向が、BSという実践的著作に引き継がれていくのではないだろうか。そしてその実践の勧めは、王への書簡という形で、RAやSLとして著される。これらは王への教示であるから、年輪的に後期のものとみるのが自然であろう。これら

2書はともに、MKなどの初期の諸作品と比べ、語彙がはるかに豊富である。RAにはMKやYŚと共通する記述がみられるが、SLにはMKのような哲学的記述がみられる箇所はごくわずかだ。日常生活のレヴェルでの正しいあり方が説かれることが多い。

また、RAの第5章には二十頃の讃歌が組み込まれており<sup>368</sup>、これを日常的に唱えることが勧められているが、これはナーガールジュナが讃歌にも関心を持っていたこと、かつ讃歌に対する社会的な要請があったこと<sup>369</sup>を示すものであろう。CSに含まれる4讃歌をはじめ、*Stutyatīstava*や*Niruttarastava*も、RAと同時期あるいはそれ以後に著されたものではないかと思われる。これら諸讃歌は表現が非常に巧みで、MKの思想が簡潔な文章の中に比喩を用いて、分かりやすく説かれている。それゆえこれらばかりが著作技術に熟達した時期、つまり晩年に著されたものであろう。またMVīraも、これらの諸讃歌と内容的にも分量的にも類似している。一方PHは、性格的にはこれら諸讃歌などにつながるもので、記述態度もそれらに近いものであるが、十二支縁起を3分類して説明する内容からはMKから直接派生した感が否めず、やや早い時期と考えられる。先にみたようにPH6とYŚ12が意味的に表裏一体の関係にあることを考慮すると、PHはYŚと同時期あたりに著された可能性もあろう。

これら諸著作成立の時間的関係をあえて図表にすると、次ページのようになる。ただし、この図表は仮に真偽性を判定したものにさらに著作順を想定するという、二重の仮説に基づいたものであって、崩されるためにあるようなものである。今後はそれぞれの著作について真偽性の根拠を積み重ねるとともに、この図表にもさらに改正を加えていかなければならないだろう。

<sup>368</sup> 白岩顕成 (1990) pp.40.15-42.12.  
<sup>369</sup> 白岩顕成 (1988) p.145.22-28.



\*ここでの Stanas とは、CS の 4 つと *Satyajñānastava* および *Nṛutānastava* を指す。

略語および参考文献

本論文中では以下の太字部分をそれぞれの文献の略語として使用した。(一人の著者が同一の年に異なる 2 つ以上の出版を行っている場合には、いずれかの年代に\*\*あるいは\*\*をつけ、区別した。)

『梵仏典 III』塚本啓祥, 松長有慶, 磯田照文 編著, 『梵語仏典の研究 III 論書篇』, 平楽寺書店, 京都, 1990.

『梵仏典 IV』塚本啓祥, 松長有慶, 磯田照文 編著, 『梵語仏典の研究 IV 密教経典篇』, 平楽寺書店, 京都, 1989.

『仏解題』水野弘元, 中村元, 平川彰, 玉城康四郎 編, 『仏典解題事典 一新・仏典解題事典 第二版一』, 春秋社, 東京, 1977.

『大藏経事典』鎌田茂雄, 河村孝照, 中尾良信, 福田亮成, 吉元信行 編, 『大藏経全解説大事典』, 雄山閣出版, 東京, 1998.

IASWR, Microfiche Edition, The Institute for Advanced Studies of World Religions, New York.

『岩仏詩』中村元, 福永光次, 田村芳朗, 今野達, 末木文美士 編, 『岩波仏教辞典 第二版』, 岩波書店, 東京, 2002.

『広辞苑』新村出 編, 第五版, 岩波書店, 東京, 1998.

Mvy. 楠亮三郎, 『梵藏漢和四訳対校翻訳名義大集』, 1916, reprint 鈴木学術財団, 東京, 1962.

足達 瑛光 (1975) 「唯識における仏身論 一解深密經、撰論、成唯識論を対比して一」, 『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』, 9, pp.15-24.

天野 宏英 (1964) 「ハリバドラの仏身論」, 『宗教研究』, 179(37-4), pp.27-57.

Apte, V. Sh. (1957) *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Poona, reprint Rinsen Book Company, Kyoto, 1978.

荒牧 典俊 (1974) 『大乘仏典 8 十地経』, 中央公論社, 東京.

荒牧 典俊 (1976) 「唯識三十論」, 『大乘仏典 15 世親論集』, 中央公論社, 東京, pp.31-190.

荒牧 典俊 (1976\*) 「三性説ノート (1)」, 『東洋学術研究』, 15-1, pp.18-37.

荒牧 典俊 (1976\*\*) 「三性説ノート (2)」, 『東洋学術研究』, 15-2, pp.17-34.

Bagchi, P. C. (1931) "Bodhicittavivarana of Nāgārjuna", *The Indian Historical Quarterly*, 7-4, pp.740-741.